幾何学的な表現学習

福水健次 統計数理研究所

機械学習若手の会(YAML)2024 2024.9.22@ 浜名湖

自己紹介

1989. 京都大学理学部卒業(主として数学)



1989-1998. (株) リコー,研究開発本部 文字認識,音響信号処理,ニューラルネットの研究・開発



1996. 京都大学博士(理学)

1999-2000. 理化学研究所・脳科学総合研究センター・ 甘利俊一研究室・研究員 ニューラルネットの統計的研究



2000-現在. 統計数理研究所 機械学習,数理統計の研究



2018 — (株)Preferred Networks 技術顧問



2020 – JST CREST 「数理知能表現による深層構造学習モデルの革新」

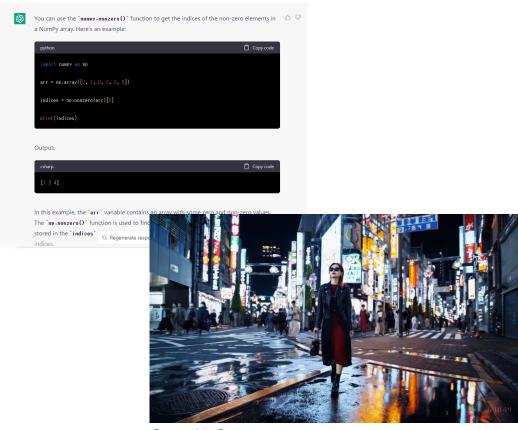
機械学習の現在

- 深層学習を中心とする人工知能技術の 革新的発展
 - 画像,自然言語処理,音声,自動運転,ロボット,…
- ・深層生成モデル
 - 画像生成 Stable Diffusion, Midjourney, …
 - 大規模言語モデル
 ChatGPT, Gemini, LlaMa, o1, …
 - 動画生成 Sora



Tell me a python function that tells an index for non-zero vances in

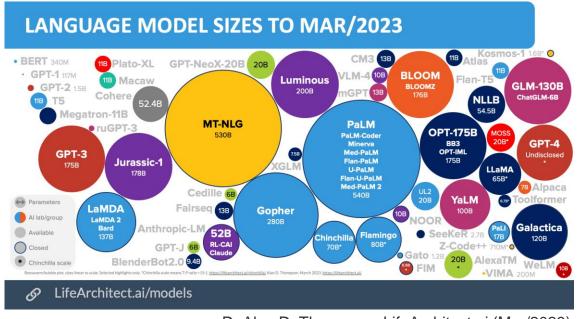
Stability.AI, Stable Diffusion XL



OpenAI, Sora

人工知能 vs 数学的知

- •深層学習による人工知能: 経験(データ)的知識獲得
 - Large Data / Large Model
 - ・データからの知識獲得
 - 表現学習:Implicitな情報表現 大量データにより 有効な表現を自動獲得



Dr Alan D. Thompson, LifeArchitect.ai (Mar/2023).

• 数学的知: 演繹的知

科学的知識は、伝統的には 「数学」により記述されてきた

e.g. 微分方程式

$$\rho \frac{D\boldsymbol{u}}{dt} = -\nabla p + \mu \nabla^2 \boldsymbol{u} + \frac{1}{3} \mu \nabla (\nabla \cdot \boldsymbol{u}) + \rho \boldsymbol{g}$$

Mathematics is the language with which God has written the universe
- Galileo Galilei

代数

構造を抽象化する

• 人工知能+数学的知

数学的知により、経験的知である人工知能技術をどのように変革できるか? 代数構造、幾何学、微分方程式、etc

講演の概要

- 1. イントロ
- 2. 対称性と群の作用
- 3. 機械学習と群作用
- 4. 群の表現
- 5. Neural Fourier Transform
- 6. まとめ

対称性と群の作用

対称性

デザイン

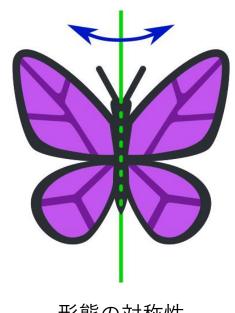


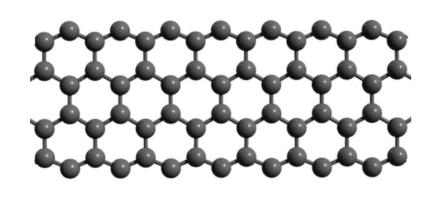
葵の御紋

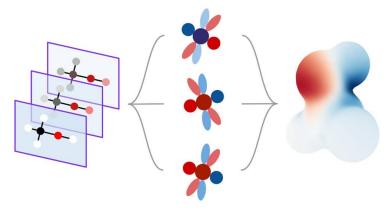


Cloisters, University of Glasgow

自然界







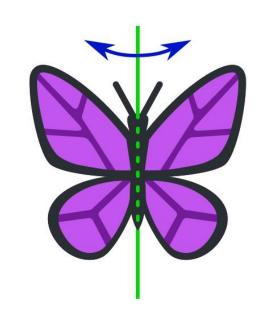
[Thürlemann et al. *J. Chem. Theory Comput.* 2022]

形態の対称性

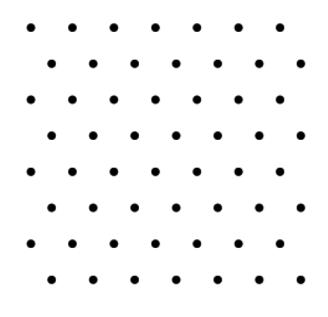
結晶格子

原子配置/ポテンシャル

対称性をとらえる変換







鏡映

回転

平行移動

群と群の作用

群: 対称性とそれをとらえる変換を数学的に定義したもの 定義 群 (group)

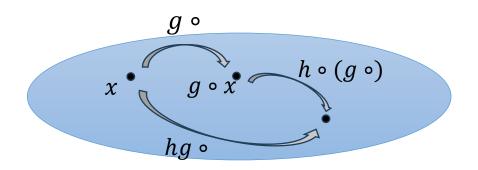
空でない集合 G に演算が定義されている(積で表記)とき, G が $\underline{\textbf{\textit{\#}}}$ であるとは,

- (1) (結合律) (ab)c = a(bc) for any $a,b,c \in G$.
- (2) (単位元の存在) $e \in G$ があって,ae = ea = a for any $a \in G$.
- (3) (逆元の存在) 任意の $a \in G$, に対し, $a^{-1} \in G$ があって $aa^{-1} = a^{-1}a = e$.
 - 例1) $(\mathbb{Z}^n,+)$, $(\mathbb{R}^n,+)$ 加法に関して可換な群(Abel群). a+b=b+a.
 - 例2) $GL(\mathbb{R}^m)$ 一般線形群(可逆な $m \times m$ 行列全体)積に関して群. 非可換 $AB \neq BA$. 部分群 O(m) 回転群

• <u>群の作用</u>

<u>定義</u>

- G: 群, X: 集合.
- $G \cap X \cap \mathcal{O}$ 群作用 とは、各 $g \in G$ に対して $X \cap \mathcal{O}$ 変換 $g \circ \mathcal{O}$ が定まって
- i) $e \circ x = x$ $(e \in G$ は単位元)
- *ii)* $(hg) \circ x = h \circ (g \circ x)$



• 典型的な例:

- 1) $GL(\mathbb{R}^m)$ の \mathbb{R}^m への標準的な作用 $A \circ x \coloneqq Ax$ (行列とベクトルの積) O(m): 回転群
- 2) シフト: $G = (\mathbb{R}^m, +)$ の \mathbb{R}^m 自身への作用 $a \circ x \coloneqq x a$.
- 3) $\mathcal{F} = \{f: G \to \mathbb{R}^m\}$ (群上の写像) $L_g(f) \coloneqq [h \mapsto f(g^{-1}h)]$ L_g は G の \mathcal{F} への作用を定める.

不変性, 同変性

定義.

群 G が集合 X と Y に作用. 写像 $\varphi: X \to Y$.

• φ がGの作用に対して $\underline{$ 不変(invariant)</u>とは,

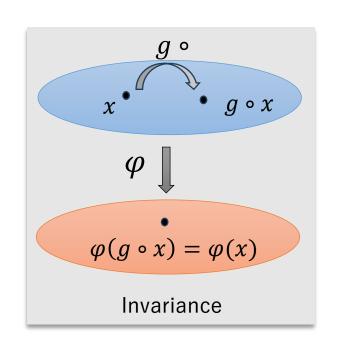
$$\varphi(g \circ x) = \varphi(x)$$

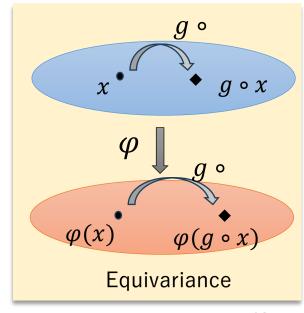
が任意の $g \in G, x \in X$ に対して成り立つこと.

• φ がGの作用に対して $\overline{\textbf{同変}}$ (equivariant)とは

$$\varphi(g \circ x) = g \circ \varphi(x)$$

が任意の $g \in G, x \in X$ に対して成り立つこと.

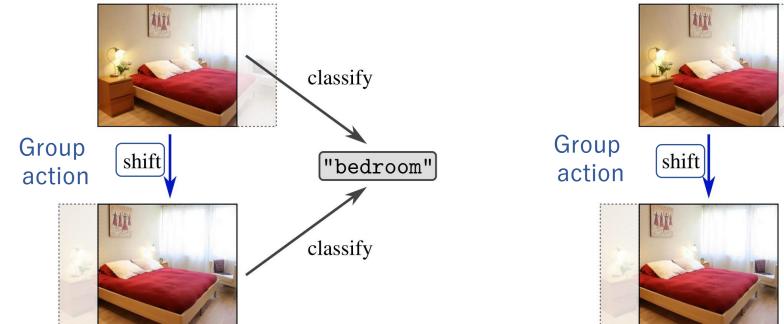


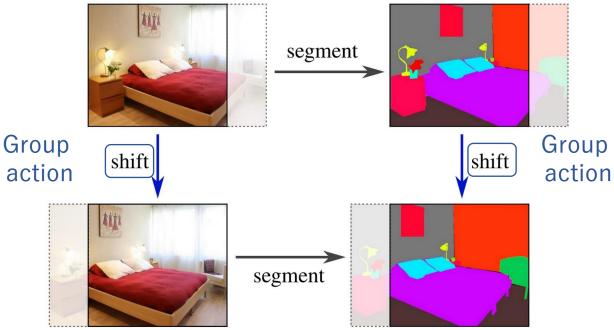


機械学習における群作用

不変性 object classification

同変性 segmentation





From "Groups, Representations & Equivariant maps" by Maurice Weiler (University of Amsterdam)

機械学習と群作用

不変性/同変性を用いた深層学習

不変性/同変性:多くの有用なモデルで利用

- Architecture: モデル構造により同変性実現
 - Convolutional Neural Network (CNN):
- Data augmentation: データ拡張に利用
 - データを変換により拡張して学習する.
 - 不変な識別機の学習
 - 「自己教師あり学習」. 変換したものは近い表現

これらのアプローチでは群 G はknown

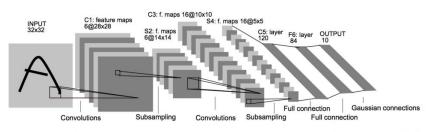
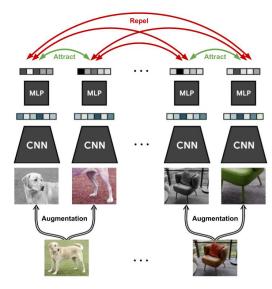


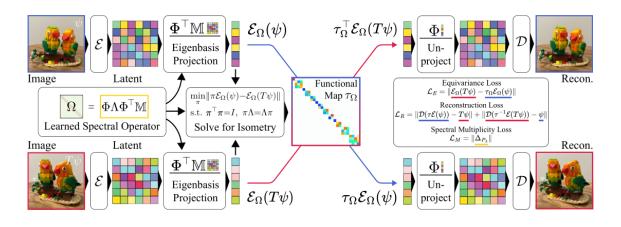
Fig. 2. Architecture of LeNet-5, a Convolutional Neural Network, here for digits recognition. Each plane is a feature map, i.e. a set of unit whose weights are constrained to be identical.

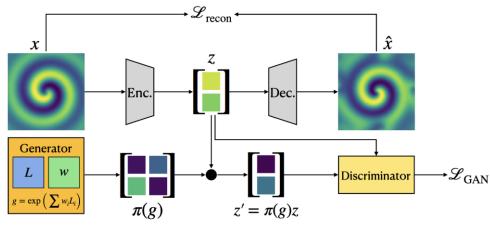
LeCun 1998



SimCLR

- 同変性に基づく表現学習 同変になるように学習を行うことによってよい表現を得る. 今日の本題
 - Meta-sequential prediction (Miyato, Koyama, Fukumizu NeurIPS 2022)
 - Neural Fourier Transform (Koyama, Fukumizu, Hayashi, Miyato ICLR 2024)
 - Neural Isometries. (Mitchel et al arXiv 2024)
 - Latent Space Symmetry Discovery. (Yang et al ICML 2024)



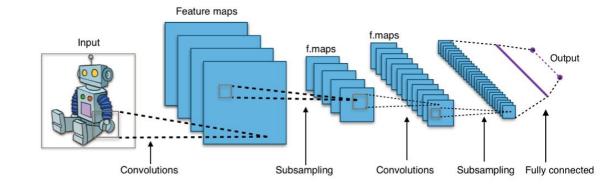


Neural Isometry

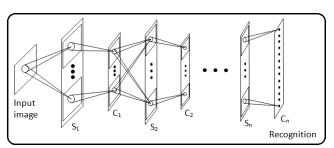
Yang et al ICML 2024

Convolutional Neural Networks

- CNN (Wei Zhang et al 1988; Yann LeCun 1989)
 - 平行移動同変性を実現するNNアーキテクチャ. 画像入力を想定
 - 畳み込み層+ Pooling層 Backpropで学習.
 - ・生物の初期視覚野の神経回路網モデルに触発されている.
 - オリジン: Neocognitron (Fukushima 1980) Backprop は使われていなかった.







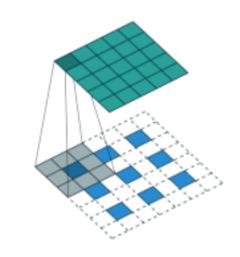
画素[*i*, *j*]の値 *f* [*i*, *j*]

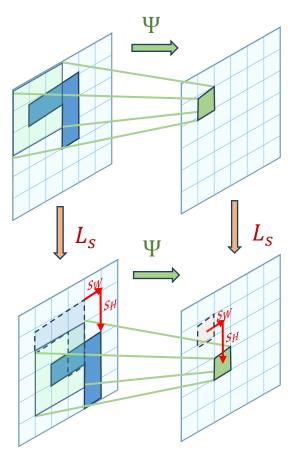
- ・畳み込み層
 - 2D グレイスケール画像 $(W \times H)$

$$\psi_{[a,b]}$$
:空間フィルタ $(3 \times 3 \text{ or } 5 \times 5)$.

$$h_{[i,j]}^{Out} = \sum_{i-a \in \{0,\pm 1\}} \sum_{j-b \in \{0,\pm 1\}} \psi_{[i-a,j-b]} f_{[a,b]}^{In}$$
 $f_{[i,j]}^{Out} = \phi \left(h_{[i,j]}^{Out} + \theta \right) \quad \phi$: 活性化関数

• 畳み込み層, Pooling層は同変写像

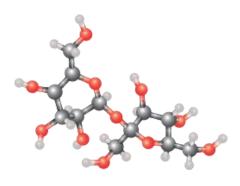




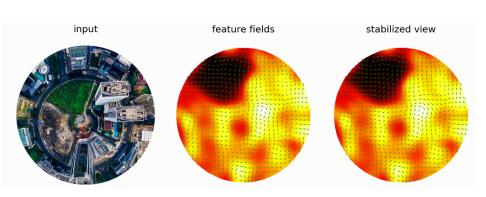
Group equivariant Convolutional Networks

(Cohen & Welling ICML 2016)

- G-CNN: さまざまな群Gの作用に対して同変なCNN
 - CNN
 - ・画像:2次元格子からの写像。 $f: \mathbb{Z}^2(\overline{\text{m}}_{\mathbb{R}}) \to \mathbb{R}^3(RGB).$
 - \mathbb{Z}^2 のシフトに対してCNNは同変. $\Psi_{\text{Conv}}(f(\cdot s)) = (\Psi_{\text{Conv}}f)(\cdot s).$



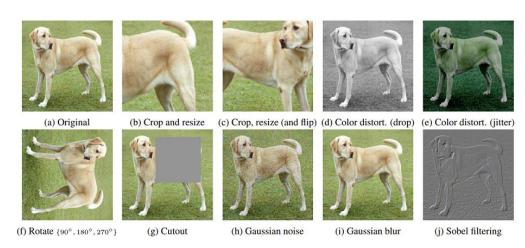
- G-CNN
 - 入力信号:一般の群Gからの写像. $f:G \to \mathbb{R}^K$.
 - G から決まるシフト作用に関して同変. $\Psi_{\text{Conv}}(L_a f) = L_a(\Psi_{\text{Conv}} f)$.

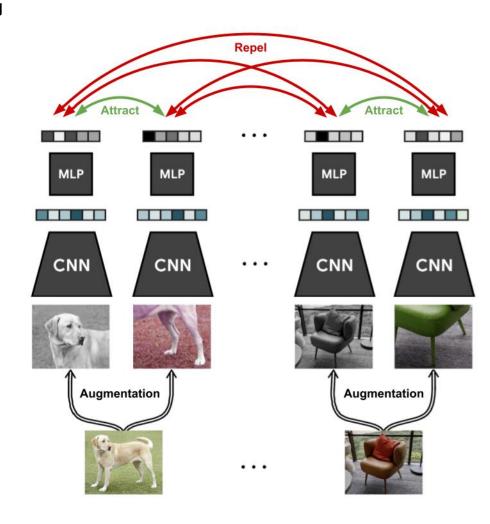


https://github.com/QUVA-Lab/e2cnn

自己教師あり学習:データ拡張

- 教師ラベルのない画像データからの特徴学習
- データ拡張:色変化,切り抜き,回転など (群作用とは限らない)
- Contrastive Learning
 元データと変換データは近い出力を, 他の画像は遠い出力なるよう学習.
- SimCLR [Chen et al 2020], Contrastive Predictive Coding [van der Ord et al 2018] etc





群の表現

群の表現群の線形な作用

• 群の表現

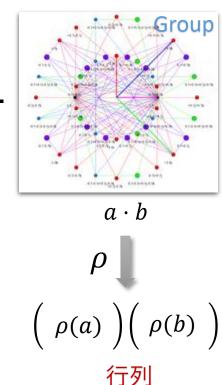
群の性質を線形変換を通して解析するための数学的方法.

定義. G: 群. V: ベクトル空間. GL(V): V上の可逆線形変換全体. ρ : $G \to GL(V)$

が群 G のV上の $\underline{表現}$ であるとは, ρ が<u>群準同型</u>であること, すなわち,

$$\rho(e) = I_V, \quad \rho(ab) = \rho(a)\rho(b) \quad (\forall a, b \in G).$$

 ρ はG の V への線形な作用を定める. $x \mapsto \rho(a)x$

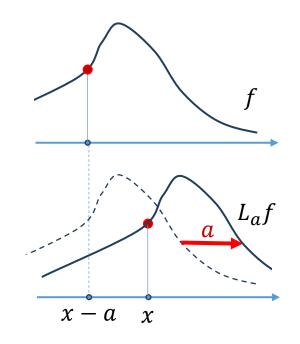


正則表現

関数のシフトを表す. CNNで使われている.

定義. G: 群. $V \coloneqq \{f: G \to \mathbb{R}\}$ G上の関数全体.

$$L_g: V \to V, f \mapsto [h \mapsto f(g^{-1}h)]$$



 L_g はGの表現($\overline{\text{正則表現}}$ と呼ぶ), すなわち

- 線形写像, $(L_g(c_1f_1+c_2f_2)=(c_1f_1+c_2f_2)(g^{-1}\cdot)=c_1L_g(f_1)+c_2L_g(f_2))$
- $L_{gh} = L_g \circ L_h$.

例)
$$G = (\mathbb{R}^d, +), \ a \in G. \ (L_a f)(x) = f(-a + x) = f(x - a).$$

群表現の分解

<u>定義</u>(既約表現)群G の表現 (ρ ,V) に対し, $\{0\}$ でもVでもない部分空間 $W \subset V$ があって $\rho(g)W \subset W$ を満たす(したがってWへの制約がまた表現 になる) とき, (ρ ,V) は<u>可約</u> であるという.可約でないとき既約という.

可約
$$\begin{pmatrix} A(g) & B(g) \\ \mathbf{0} & D(g) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} w \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} A(g)w \\ 0 \end{pmatrix}$$

定義(直和) 群G の表現 $(\rho_1, V_1), (\rho_2, V_2)$ の直和: $\rho_1 \oplus \rho_2 \colon G \to V_1 \oplus V_2,$ $g \mapsto \rho_1(g) \oplus \rho_2(g).$

$$\rho(g) = \begin{pmatrix} \rho_1(g) & O \\ O & \rho_2(g) \end{pmatrix}$$

• <u>定義</u> 表現 ρ が<u>完全可約(半単純)</u>とは,既約表現の直和と同値になること. $\rho\cong\rho_1\oplus\rho_2\oplus\cdots\oplus\rho_k$

共通の基底をとって、任意のgに対して同時ブロック対角化できる場合。

$$\rho(g) = P \begin{pmatrix} A_1(g) & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & A_2(g) & \ddots & 0 \\ \vdots & & & \vdots \\ 0 & & \cdots & A_k(g) \end{pmatrix} P^{-1}$$
 基底変換 P は g に非依存 $A_i(g)$ は既約表現

- ・以下のクラスは、任意の有限次元表現が完全可約となる.
 - 有限群
 - 局所コンパクトアーベル群 (SO(2), etc)
 - コンパクトLie群 (O(n), etc).
- 完全可約でない例: ユークリッド運動群 E(n)

$$E(n) = \left\{ \begin{bmatrix} A & b \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \middle| A \in O(n), b \in \mathbb{R}^n \right\}$$
$$\begin{bmatrix} A & b \\ 0 & 1 \end{bmatrix} {x \choose 1} = {Ax + b \choose 1}$$

Neural Fourier Transform: データからの学習によるFourier変換

Miyato, Koyama, Fukumizu. NeurIPS 2022; Koyama, Fukumizu., Hayashi, Miyato. ICLR 2024



Takeru Miyato
(U Tubingen/
Preferred Networks)



Masanori Koyama (Preferred Elements)

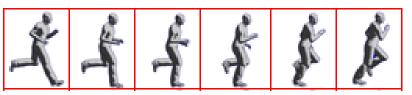


Kohei Hayashi (Preferred Elements)

群作用を用いた系列データからの表現学習

(Miyato, Koyama, Fukumizu, NeurIPS 2022; Koyama, Fukumizu, Hayashi, Miyato, ICLR 2024)

• **潜在的な**群作用を用いた表現学習

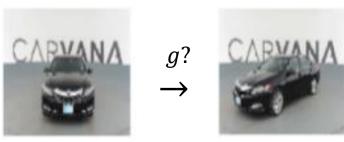


- 作業仮説:「動き」の中に有効な特徴が潜在している
- **群作用**から生じると仮定する

ペア $(x,g \circ x)$, 系列 $(x,g \circ x,g^2 \circ x,...,g^T \circ x)$ からの表現学習

- 潜在的な群作用. 群は知らない
 - 画像自体への変換とは限らない
 - 直接観測できるとは限らない

データからの未知/既知の対称性の抽出



3D空間での回転



非線形な観測(魚眼レンズ)

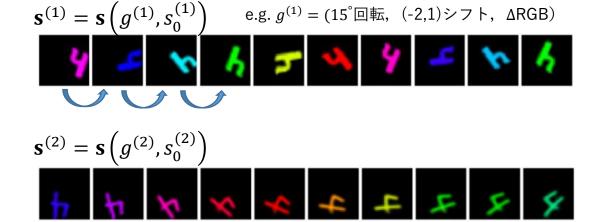
最も基本の問題設定:教師なしの表現学習

• データの生成モデル:群作用による定常な系列データ

G: 群, S に作用.

系列:
$$\mathbf{s} = (s_0, s_1, s_2, ..., s_T)$$
. $s_t = g^t \circ s_0$, $\mathbf{s} = \mathbf{s}(g, s_0)$ $g \in G$ は系列ごとに異なってよいが系列内では一定.

• 多数の系列データからの<u>教師無し学習</u> G も $g \in G$ も作用も知らない



回転,平行移動,色の回転

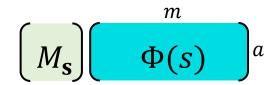
初期画像 s_0 と群の元 $g \in G$ を決めると、ひとつの系列 s が生成される.

Autoencoderによる線形な遷移則の学習

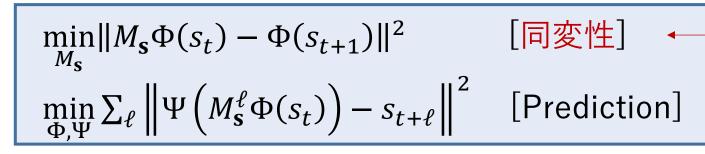
Meta Sequential Learning (MSP)

$$\mathbf{s} = (s_t)_{t=0}^T$$
 $s_{t+1} = g \circ s_t$

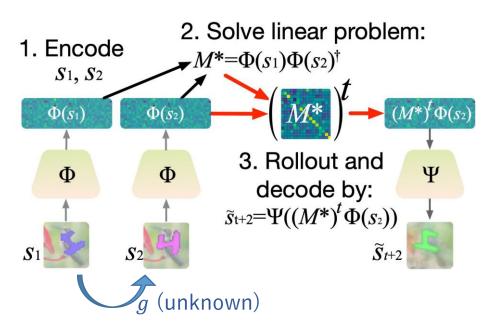
- Autoencoder:
 - Encoder $\Phi: \mathcal{X} \to \mathbb{R}^{a \times m}$, Decoder $\Psi: \mathbb{R}^{a \times m} \to \mathcal{X}$
- 潜在表現の遷移則は線形:
 行列 M_s 系列依存.



- 潜在空間は行列: 表現能力を落とさずに *M*_sの次元を小さくできる.
- M_s, Φ, Ψ の学習



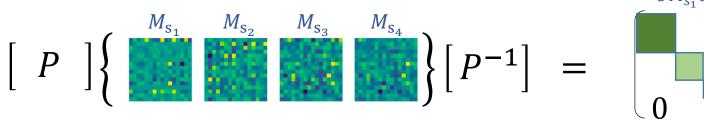
モデル



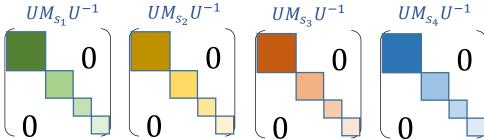
Φを固定すると, 最小 2 乗誤差で*M*が決まる.

変換行列の既約分解

- 変換行列 M_s は系列 s ごとに異なる変換 g に依存,M(g)と書ければ群の表現
- 表現の既約分解 $\rightarrow \{M_s\}_s$ の同時ブロック対角化 系列に依存しない基底変換により、同時にブロック対角化を行う 各ブロックは既約表現 \rightarrow 分解された表現.



基底変換 P は共通

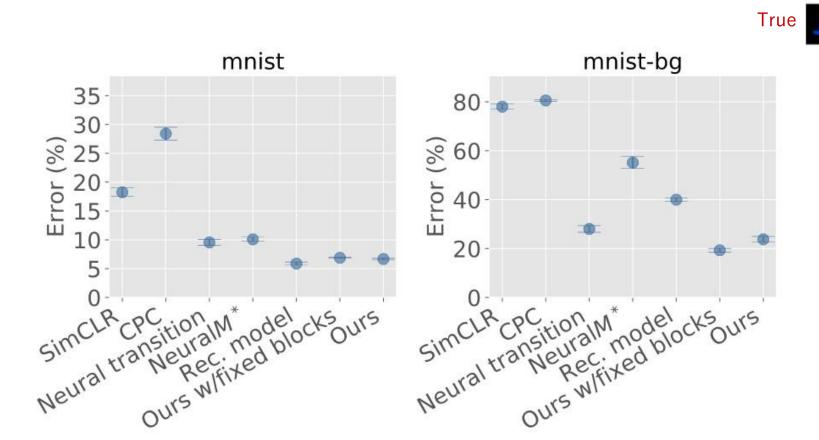


表現論によるDisentanglement

実験 1: 表現学習としての有効性

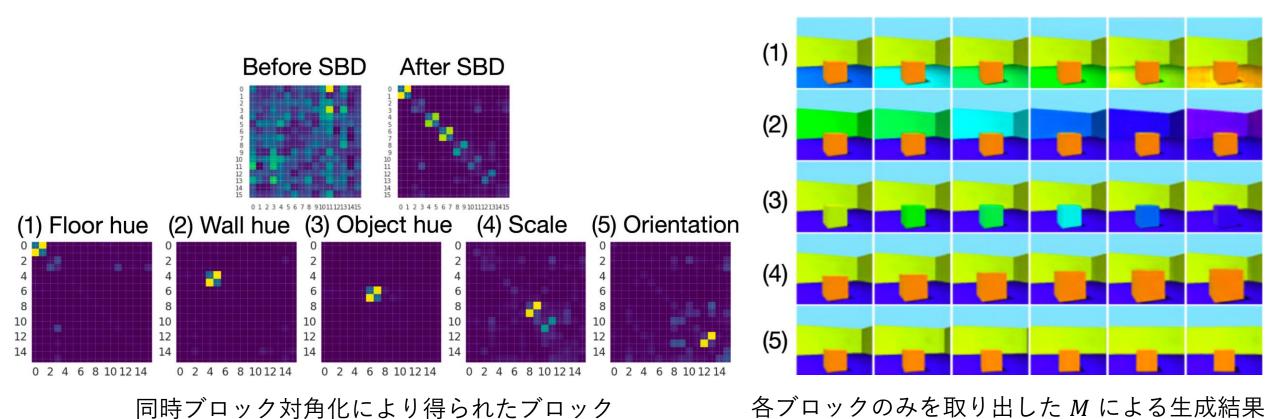
• Encoder出力 $\Phi(x)$ を用いて<u>線形</u>識別タスクを解く MNIST 画像"4"の系列データのみで学習 \rightarrow "0",…,"9". 10クラスの識別を解く.

Pred



* SimCLR, CPC: 自己教師あり学習

• 実験 2 :既約分解による Disentanglement



33

Fourier変換

• (復習)古典的なFourier変換 $\mathbb{S}^1 \cong [0,1]$ 上のFourier変換 (Fourier級数展開)

$$\hat{f}_n = \Phi(f)(n) = \int_0^1 e^{-2\pi\sqrt{-1}nx} f(x) dx, \qquad f(x) = \frac{1}{2\pi} \sum_{n=-\infty}^{\infty} e^{2\pi\sqrt{-1}nx} \hat{f}_n$$

S¹は加法群, fは群上の関数

- Fourier変換はより一般の群に対して定義可能
 - 可換群(局所コンパクトアーベル群): ほぼそのまま拡張可能 $\Phi: L^2(G) \to L^2(\widehat{G}), \quad f \mapsto \widehat{f}(\rho) \coloneqq \int_G \overline{\rho(x)} f(x) dx.$

 $\rho(x)$ は既約表現(常に1次元)(\mathbb{S}^1 の例では,あるn に対する $e^{2\pi\sqrt{-1}nx}$ に相当)

コンパクト群 Fourier変換

$$\Phi(f) = \hat{f}(\rho) := \int_G f(g)\rho(g)^* dg = \int_G f(g)\rho(g^{-1}) dg$$

 $[\rho] \in \hat{G} \coloneqq \{Gの既約ユニタリ表現の同値類\} 周波数の空間$

- $\rho(g)$ は一般に行列値関数。 $d_{\rho} \coloneqq \dim \rho$
- Fourier inversion

$$f(g) = \sum_{[\rho] \in \widehat{G}} d_{\rho} \operatorname{Tr} [\rho(g) \hat{f}(\rho)]$$

Fourier変換の同変性

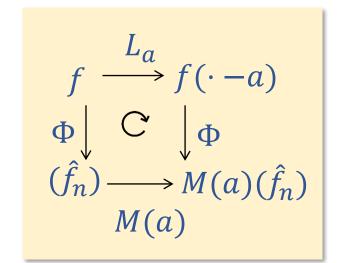
- Fourier変換の同変性
 - $\mathbb{S}^1 \cong [0,1]$ 上のシフト $L_a f \coloneqq f(\cdot -a)$ に対するFourier変換

•
$$\mathbb{S}^{1} \cong [0,1]$$
上のシフト $L_{a}f \coloneqq f(\cdot -a)$ に対するFourier変換
$$\Phi(L_{a}f) = (e^{2\pi\sqrt{-1}an}\hat{f}_{n}) = \begin{pmatrix} \ddots & \cdots & 0 \\ \vdots & e^{2\pi\sqrt{-1}an} & \vdots \\ 0 & \cdots & \ddots \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \vdots \\ \hat{f}_{n} \\ \vdots \end{pmatrix}$$

$$= M(a)\Phi(f)$$

$$= M(a)\Phi(f)$$

$$= M(a)\Phi(f)$$



- $\mathbb{S}^1 \ni a \mapsto M(a)$ は加法群 \mathbb{S}^1 の表現(線形作用)
- Φ は同変(右の図式が可換)
- 同変性は一般のFourier変換に対して成り立つ.

Neural Fourier Transform

• 提案法はFourier変換の拡張と考えられる 群 Gが空間 X に作用しているとき,以下の写像をデータから学習している.

$$L_g x pprox \Psi \circ M(g) \circ \Phi(x) = \Psi \circ P^{-1} \circ \begin{pmatrix}
ho_1(g) & O \ O &
ho_2(g) \end{pmatrix} \circ \underbrace{P \circ \Phi(x)}_{ ext{Fourier 逆変換}}$$
 Fourier inversion formula

Neural Fourier Transform: データからの学習による,任意のデータ型に対するFourier変換

- 「潜在的空間」への群の作用でOK.
- ・ 群上の関数ではなく、データに対するFourier変換
- データの記述に必要な周波数/既約成分のみを自動獲得

• さまざまなシナリオ

| | 群 <i>G</i> | 群の元g | 作用 | M(g)の推定 |
|-------|------------|---------|---------|-----------------|
| U-NFT | Unknown | Unknown | Unknown | MSPで学習 |
| G-NFT | Known | Unknown | Unknown | 調和関数の 関数系利用 |
| g-NFT | Known | Known | unknown | 調和関数 Φ,Ψのみ学習 |



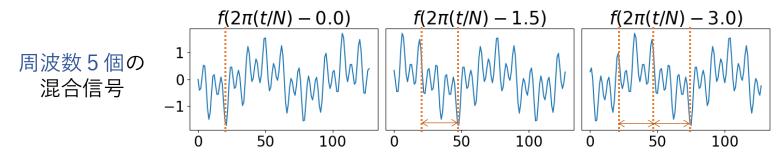




• 未知の非線形変換による観測(魚眼レンズ)

潜在空間(一定のシフト)観測されない

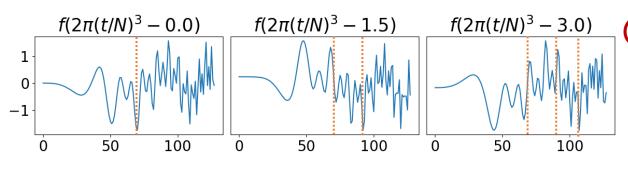
• 1次元信号の場合

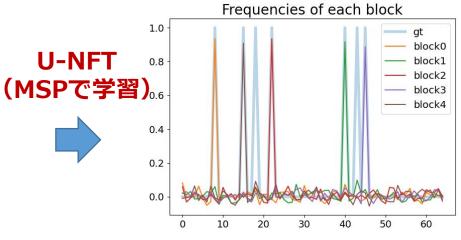


3



非線形観測 信号





正しい周波数を推定

• 2次元画像の場合



予測画像系列

真の系列

• *g*-NFT:2D画像1枚からの3次元生成

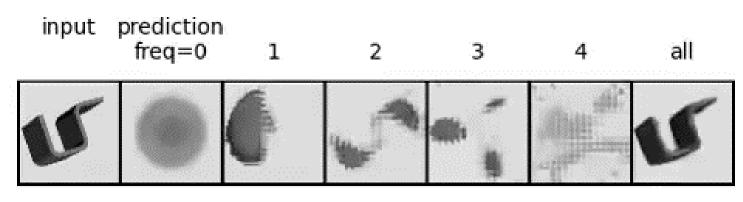
学習: 3D-CGデータを観測した 2D画像データのみによるg-NFT学習

2D画像ペアと3D回転データ (S,S',R) $R \in SO(3), S,S'$: 2D画像

M(g) 球面調和関数を仮定. Encoder, decoderのみ学習

使用時: 訓練データにない2D画像1枚

→ 任意の3次元回転を施した画像を生成





Perspective projection (P)

まとめ

- 群作用を利用する深層学習
 - アーキテクチャ: G-CNN
 - データ拡張: 不変学習, 自己教師あり学習
 - 同変性による表現学習: 新しい方向性
- Neural Fourier Transform
 - 潜在空間で線形作用になるような学習
 - 群の作用を知らなくても適用可能
 - データ駆動の非線形Fourier変換が実現可能
 - 任意のデータ型に対するFourier変換
 - 必要な周波数を自動抽出
 - 応用(今後)
 - シミュレーションで学習 → 静止2D画像の物体を自由に動かす
 - 変微分法方程式系の特徴学習

References

- Online materials
 - U Amasterdam An Introduction to Group Equivariant Deep Learning https://uvagedl.github.io/
- Textbooks on Group Theory
 - [Group Theory] J.J. Rothman. An Introduction to the Theory of Groups. Springer 1995.
 - [Representation Theory] W. Fulton, J. Harris. Representation Theory.
 Springer 2004
 - [Fourier Analysis] W. Rudin. Fourier Analysis on Groups. John Wiley& Sons, 1991

Papers

- Fukushima, Kunihiko (1980). <u>"Neocognitron: A Self-organizing Neural Network Model for a Mechanism of Pattern Recognition Unaffected by Shift in Position"</u>. *Biological Cybernetics* **36** (4): 193–202. doi:10.1007/BF00344251
- Zhang, Wei (1988). <u>"Shift-invariant pattern recognition neural network and its optical architecture"</u>. *Proceedings of annual conference of the Japan Society of Applied Physics*.
- Y. LeCun, B. Boser, J. S. Denker, D. Henderson, R. E. Howard, W. Hubbard, L. D. Jackel, <u>Backpropagation Applied to Handwritten Zip Code Recognition Archived</u> 2020-01-10 at the <u>Wayback Machine</u>; AT&T Bell Laboratories
- T. Cohen and M. Welling. Group Equivariant Convolutional Networks. ICML 2016
- Lafarge, M. W., Bekkers, E. J., Pluim, J. P. W., Duits, R., & Veta, M. (2021). Roto-translation equivariant convolutional networks: Application to histopathology image analysis. *Medical Image Analysis*, 68, 101849. https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.media.2020.101849
- M. Weiler and G. Cesa. General E(2) Equivariant Steerable CNNs. NeurIPS 2019

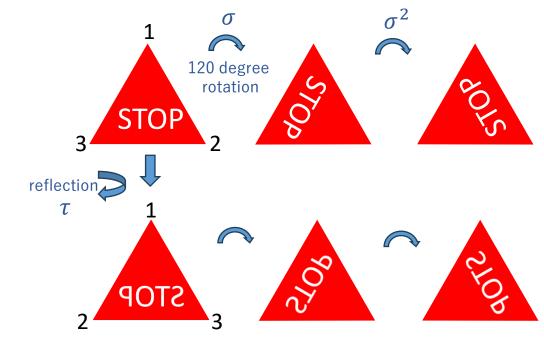
- T. Miyato, M. Koyama, K. Fukumizu. Unsupervised Learning of Equivariant Structure from Sequences. NeurIPS 2022
- M. Koyama, K. Fukumizu, K. Hayashi, T. Miyato. Neural Fourier Transform: A General Approach to Equivariant Representation Learning. ICLR 2024 https://openreview.net/forum?id=eOCvA8iwXH
- Thomas W. Mitchel, Michael Taylor, Vincent Sitzmann. Neural Isometries: Taming Transformations for Equivariant ML. arXiv:2405.19296 [cs.CV]
- <u>Jianke Yang</u>, <u>Nima Dehmamy</u>, <u>Robin Walters</u>, <u>Rose Yu</u>. Latent Space Symmetry Discovery. ICML 2024 https://openreview.net/forum?id=xbXASfz8MD

Appendix

- 例: S₃の既約表現
 - 1) 自明な表現 (1 dim)

$$\rho_e(g) = 1$$

2) Alternating representation (1 dim) $\rho_{alt}(g) = \operatorname{sgn}(g)$



3) 標準表現 (2 dim)

$$\begin{cases} \rho_{st}(\sigma) = \begin{pmatrix} \cos(-2/3\pi) & -\sin(-2/3\pi) \\ \sin(-2/3\pi) & \cos(-2/3\pi) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -\sqrt{3}/2 & 1/2 \\ -1/2 & -\sqrt{3}/2 \end{pmatrix} \\ \rho_{st}(\tau) = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \end{cases}$$

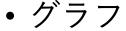
©₃ の既約表現は上の3つだけであることが知られている. (See, e.g., Fulton Harris)

G-CNNの目的

$$E(n) = \left\{ \begin{bmatrix} A & b \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \middle| A \in O(n), b \in \mathbb{R}^n \right\}$$
$$\begin{bmatrix} A & b \\ 0 & 1 \end{bmatrix} {x \choose 1} = {Ax + b \choose 1}$$

Symmetries

- 画像の多くの特徴はEuclid運動群(回転 + シフト)に対して不変(E(2), SE(2)).
 - 医療画像データ:回転やシフトはあまり意味を変えない. c.f., 自然画像(部屋, 道路など), 文字画像 (アルファベット, 数字など)は回転で意味が変わる.
- 3D データ/360度画像(SO(3), E(3))
 - 3D スキャナ, レンダリング.
 - 360度カメラ.
 https://github.com/QUVA-Lab/e2cnn?tab=readme-ov-file



- ・置換に関して不変
- 3次元内のグラフ構造, e.g., 分子(SE(3))

